

厚田が育んだ偉人 戸田城聖を語る

－『創価教育学体系』出版前後を中心に－

塩原将行

はじめに

1. 生涯の師・牧口常三郎の青年時代の夢と理想
 - a. 人道の時代への期待と庶民の女子教育の実践
 - b. 牧口常三郎を育んだ北海道の人々
2. 北海道と戸田「甚一」
 - a. 戸田を育んだ厚田の自然と人々
 - b. 炭鉱の街・夕張で教師として思索したこと
3. 牧口を支えた弟子・戸田「城外」
 - a. 戸田の上京と牧口との出会い
 - b. 戸田の挫折と牧口の励まし
 - c. 『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』を出版
 - d. 牧口の夢である『創価教育学体系』出版を全面支援
 - e. 創価教育学の目指すもの
 - f. 教育者・戸田の再発掘① 「新教材集録」の編集・発行
 - g. 日蓮仏法との出会いと宗教活動への傾斜
 - h. 教育者・戸田の再発掘② 「小学生日本」と通信教育
 - i. 大道書房と同郷の子母沢寛との交流
4. 牧口の後継者としての戸田「城聖」
 - a. 獄中書簡及び出獄直後の手紙から
 - b. 教育者・戸田の再発掘③ ざら紙で作られた学習参考書
 - c. 戸田を支えた池田大作青年
 - d. 創価大学創立を池田青年に託す

さいごに

Masayuki Shiohara (創価教育研究所事務長)

*本稿は、2月11日に北海道石狩市で行った戸田城聖生誕110周年記念講演会の原稿に加筆したものである

こんにちは、創価大学創価教育研究所で事務長をしております塩原将行と申します。どうかよろしく願いいたします。創価大学としても、また、私自身も、北海道の皆様には、大変にお世話になっております。かつて、厚田の戸田旅館に一泊し、厚田の浜から戸田先生も見ておられた厚田の海を眺めたのが懐かしい思い出です。

私は、富山県出身で、創価高校2期生として入学後、創価大学と大学院を卒業して、大学の職員に採用していただきました。草創の大学建設にあたらせていただいたことが何よりの誇りです。滝山祭の盆踊りで、池田先生が太鼓を叩いてくださいましたが、バチを握っていた先生の手の皮がむけてきたので、保健室まで必死に走って、救急絆創膏を持ってきたことが、つい昨日のことのように思い出されます。

職員になったあと、今、『新・人間革命』「学光の章」で綴られている通信教育部に7年半、そのあと、学生募集や教務、企画を担当し、2000年から、創価教育研究所の前身である、創価教育研究センターの事務長として、大学の歴史を残すことと、牧口先生、戸田先生、池田先生の行動と思想を後世に残していく仕事をさせていただいております。

はじめに

戸田城聖先生は、厚田村で育ち、夕張で教師となり、19歳の時に牧口先生と出会われました。牧口先生を支え、その間、お子様と奥様をなくされ、自身も重い結核になりました。会社経営のご苦労、戦時下における獄中生活、そして、牧口先生の死、それらをすべて突き抜けて、ご自身の中に広い世界を開かれました。戸田先生は、皆が心から納得できる話をされる方でした。

本当の教育者になるためには、わが子を亡くすか、大病するか、投獄されるか、そのいずれかひとつを経験しなければならないと語ってくれた人がいますが、戸田先生はそれらすべてを経験されました。

戸田先生は、青年時代から、教育者として、接するすべての子ども達の幸福を願ってこられました。そこを起点として、自立した民衆の大運動の、確かなる礎を築かれました。講演のタイトルに、「偉人」という言葉を使わせていただいたのは、そういう意味です。

「人」という漢字が示していますが、人は、支えられる存在があって、初めて安定し、その持っている力を最大に発揮できるものです。今日は、戸田先生が、牧口先生を支える立場で、どう生きてこられたのかを中心にお話させていただきたいと思います。

1. 生涯の師・牧口常三郎の青年時代の夢と理想

a. 人道の時代への期待と庶民の女子教育の実践

牧口常三郎先生は、明治4（1871）年、新潟県の荒浜という網作りを主な仕事とする村に生まれました。13歳の頃、小樽に渡り、働きながら勉強し、北海道師範学校、現在の北海道教育大学に入学しました。卒業後は、母校の附属小学校の教員になります。

明治34（1901）年5月、北海道師範学校の教員となっていた牧口先生は、教員を辞め家族とともに上京します。当時、牧口先生は、北海道教育会の理事として中心的存在でありました。その

まま北海道に残っていれば、安定した地位と名声が保障されていたと思います。それらをすべて振り棄てての上京でした。

牧口先生が上京を決意したのは、授業を行うために準備してきた教案が、十分に一冊の本になるだけの量になり、それを出版して世に問いたいと考えたからです。

師範学校における牧口先生の授業は、「生徒は地理の時間を待ち焦れる、という有様であった」といいます。牧口先生は、毎回の授業に十分な準備をして臨みました。それは、わかりやすく、学ぶことが、とにかく楽しいという授業でした。また、最新の新聞や雑誌からのニュースもふんだんに使った、生き生きとした内容でもありました。新聞を活用した授業の先駆けです。そして、ただ教えるだけではなく、一緒に学び、次は、自分でどんどん応用していく楽しさにあふれたものでした。その原型は、21歳の教育実習の時に生まれています。

戸田先生の時習学館での授業の楽しさについては、小説『人間革命』で読まれた方もいると思いますが、私は、創価教育は、楽しいかどうか、わくわくして参加できる授業かどうかということが、本物かどうかを判断する基準のひとつだと思っています。

北海道では、著名な牧口先生も、東京では無名です。千ページを超える出版を引き受けてくれる出版社もなかなか見つかりません。出版社の仕事などをしながら、東京帝国大学の近くの三畳の貸間で頑張りぬき、明治36（1903）年10月には、『人生地理学』が、ついに出版されることになりました。三畳一間に、牧口先生と母と妻と子供3人、6人がどうやって寝たのか悩みましたが、布団を出したあとの押し入れも使ったのではないかと考えました。

『人生地理学』の冒頭は、世界の働く庶民への感謝から始まります。赤ん坊がミルクを飲めるのも、ヨーロッパのユラ山麓で働く牧童のおかげである。また、綿の服を着て快適に暮らせるのも、炎天下に働くインドの農民のおかげであると述べています。

牧口先生が生きた19世紀後半から20世紀前半は、帝国主義の時代と言われ、強い国が弱い国を武力で支配し、植民地を広げていく時代でした。異国の貧しい庶民への感謝など、到底考えられないことでした。そういう時代にあつて牧口先生は、「人道的競争」という考えに立ちました。経済や政治や文化や軍事力の競争で、弱い国を支配するのではなく、むしろ、貧しい国に豊かな国が力を貸す、応援する、それを競い合う「人道的競争」の社会を築いていこうと述べています。今、地震や津波が起こると各国が競って援助をします。そのような社会を築いていきたいというのが、107年前の牧口先生の考えでした。

しかし、牧口先生は、そのまま地理学者の道には進みませんでした。どうしてもやりたいことがあったのです。それは、庶民のための学校をつくることです。明治38（1905）年に、34歳の牧口先生は、大日本高等女学会という通信教育の学校を神田三崎町に創立します。『新・人間革命』「学光の章」でご存知の方も多と思います。

明治時代は、小学校を卒業すると、男子には中学校、女子には女学校がありました。富国強兵の掛け声の下、国民の義務として、小学校には多くの子どもが通学しました。働く子ども達には、夜間の小学校もありました。しかし、中学校や女学校に進めるのは、経済的に裕福な家庭だけです。さらに、男性と女性では、二十歳前に結婚する女性より、家の後継ぎとなる男性の方を学校

にやります。また、昼働いて夜学ぶことや、都会に上京して学ぶことも、男性はできましたが、女性にはなかなかできません。女性は、もっと学びたいと思っても、学ぶ場所が限られていました。

牧口先生は、女性が学校に行けないならば、学校が家庭に行けばよいのではないかと逆転の発想に立ちます。当時は、郵便制度が普及し始めたころです。その最新の制度を使って、どこに住んでいても学べる通信教育の学校を創立したのです。通信教育といっても、講習会も月1回開催されます。東京の各区や各市単位でも懇話会が行われ、牧口先生も積極的に参加して、アイヌの話などをされました。11月3日には、紅葉の下、くじ引き大会が行われ、卒業式も信濃町に近い愛住女学校で行われました。

大日本高等女学会を創立する2年前に出版された『人生地理学』は、多くの人々から高い評価と共感を得ていました。牧口先生も、この出版を手がかりに、さらに研究を深めたいという気持ちがあったと思います。それを後押しするように、小樽時代の友人である藤山万吉が、経済的に牧口先生を応援したいと申し出ました。後に、彼の父が、小樽公会堂を寄付していますが、彼の家は、北海道でも有名な資産家でした。しかし、牧口先生は、この申し出に深く感謝しながらも丁重に断り、自らの学校の運営に奔走します。

そして、小学校の校長先生が推薦する少女は、入学金、授業料一切免除、父が戦争に行つて経済的に大変な子には授業料半額免除といったように、学びたいと思う子ども達が、誰でも学べる学校をつくります。一年後には生徒は全国で2万人に達し、さらには、小学校在学中の少女達との一貫教育のシステムすら考え始めるのです。

牧口先生は、学校が好きでした。でも学校という制度が持つ問題点もまた理解していました。その上で、学びたいすべての人が学べる学校を夢見たのです。

牧口先生は、日露戦争で国中が戦争一色になっている時代に、庶民のための学校を創立しました。この時代については、『坂上の雲』という小説に詳しく書かれておりますので、読まれた方もおられるでしょう。牧口先生は、この時代に、最も弱い庶民の女性が自立できるための学校を構想しました。しかし、その理想は、日露戦争後の大不況によって吹っ飛んでしまいます。今、「百年に一度の大不況」といわれていますが、その百年前の大不況がこの時でした。「おしん」という番組を覚えておられますか。その時代です。とても女性の教育なんかにお金を出せないということになりました。牧口先生も借金を抱えて、家族共々大変な御苦労をされます。それでも、もう一度篤志家から寄付を募り、規模は小さいですが、入学金・授業料が一切かからない学校をつくります。なぜ、そこまでしなければならなかったのでしょうか。牧口先生は、精神的にも経済的にも自立した女性を育成しようとしていました。幸福は、自らの力で勝ち取らなくてはいけない。それが、牧口先生の信念でした。

しかし、その学校も、そう長く維持できず、その後、牧口先生は、文部省での地理教科書の編集の仕事を経て、東京市の小学校の校長を歴任することになります。

b. 牧口常三郎を育んだ北海道の人々

それでは、なぜ、牧口先生はそのような発想に立てたのでしょうか。学生からよく受ける質問

があります。それは、「戸田先生の師匠は牧口先生ですが、牧口先生の師匠は誰ですか」というものです。

私は、牧口先生の本かれたものは、その引用文献にすべてあたりました。北海道時代を含め、接した人物もすべて調べました。学問的に影響を受けた人はいても、これはという人物は、浮かび上がってきません。ある人は、牧口先生は、自解仏乗、自分で悟った人であると言いましたが、必ず影響を与えた人物がいるはずだと考えました。

そのヒントを、岩内に住んでいた牧口先生の父違いの弟の娘さんが語っておりました。牧口先生のお父さんは、幼少の頃、北海道に行ったまま行方知れずとなり、その為、母は再婚したため、牧口先生は、お父さんの妹夫婦のもとで育てられました。お話によれば、東京の牧口家に行儀見習いで滞在した折、育てのお母さんは目が見えなかったそうですが、牧口先生は、校長として多忙であったにもかかわらず、離れたところにあるお風呂場に、母をおぶって行って背中を流してあげるのを、その方は何度も見たというのです。男尊女卑の時代にあって、牧口先生のこの姿は、女性として心から尊敬できるものでしたとのことでした。牧口先生は、育ててくれたこのお母さんに深い感謝の気持ちを持ち続けておられたと思います。

何度か北海道での調査を重ねる中で、名前もはっきりとはわかりませんが、牧口先生を温かく励ましたであろう人々の存在も浮かび上がってきました。何を言いたいかという、牧口常三郎は、北海道という大地が生んだ「大地の子」ではないかということです。北海道は、厳しい自然環境の中、皆が助け合い、皆で子ども達を見守り、育ててこられました。牧口常三郎は、北海道の無名の人々によって育まれた存在ではなかったかと思うのです。だから、牧口先生は、庶民への感謝、庶民のための学校という視点から出発することができたのではないかと思うのです。

2. 北海道と戸田「甚一」

a. 戸田を育んだ厚田の自然と人々

明治時代の北海道の新聞を読んでいた際に、厚田村の小学校の運動会の記事がありました。村人がカンパしておやつを差し入れたというのです。この記事を読んだ時、厚田というところは、子ども達を大事にするところだなという印象を持ちました。

戸田先生の最初の名前は、甚一といいます。明治33（1900）年2月11日、石川県の塩屋に生まれました。2歳の時、家族で厚田村へ移住、大正4（1915）年、年季奉公で札幌に行くまで、13年ほどを厚田の地で過ごしています。

私は、4歳の時に引っ越しを経験しましたが、それ以前の記憶はほとんどありません。4歳から15歳までいた所では、一緒に遊んだ小学校、中学校の友人のことや町内の人々、家の前の小さな川にいたホタルなど、何でこんな細かいことまでと思えるほど憶えています。戸田先生にとって厚田には、同じ様に楽しい思い出が、たくさん詰まっていたと思います。

先日、会った方がこんな話をしていました。水滸会という青年の研修があつて、先に準備に行った青年が、戸田先生が大事に食べようと思っていた厚田のミガキニシンを、おながすいていたのでしょうか。全部食べてしまいました。それに対して、戸田先生が本気になって怒っていた

というのです。いつまでも故郷の味は特別だったのかなと思います。

獄中からの手紙にも、「厚田に手紙をやって 鯨、数の子、干し鯨、天草 例年通り注文しておきなさい。お金は後で送ります。出来る丈沢山頼んでおきなさい」と書いています。

創価大学の建学の精神のひとつに、「大文化建設の揺籃たれ」とあります。揺籃とは、「ゆりかご」のことです。この言葉はどこから考えられたのだろうと探したことがありました。かつて、戸田先生は、青年達と一緒に、奥多摩の小河内ダムを訪ねました。そのダムを作るため湖底に沈んだ村がありました。その村を歌った歌詞の中に、「さらば湖底の わが村よ、幼き夢の ゆりかごよ」とあります。戸田先生にとって、ゆりかごのように育ててくれたのが、厚田の自然と人々であったのではないのでしょうか。

戸田先生の小学校時代の担任であった河合裸石、^{はせべ}支部沈黙の影響も考えました。二人は文筆家であり、文学的素養や世界に目を開かせたことなど、大きな影響を与えたと思います。しかし、それ以上のものを、厚田の人々から受けていたのではないかと思うのです。厚田の学校を大切にされたのも、その表れではないかと思えます。

最近、「北海道で数学を勉強した時は一里位の山を越えて教わりにいったもんだ」という戸田先生の発言が見つかりました。これは、厚田の時代か、夕張か、検討したいと思っています。

b. 炭鉱の街・夕張で教師として思索したこと

戸田先生は、札幌の小六商店で働きながら勉強して、教員の資格を取り、大正7（1918）年から夕張の真谷地の小学校の教員になりました。この頃から、城外という名前を使うようになります。当時、夕張は、日本一大きな炭鉱町として栄え、多くの炭鉱夫と家族が住んでいました。しかし、炭鉱夫の生活は悲惨です。先日、夕張の炭鉱博物館を見学しましたが、真っ黒になって働く炭鉱夫の展示の中で、驚いたことがあります。夕張炭鉱では、湯船の中には、入れないということです。一人が入ったら最後、他の人は使えなくなってしまうからです。それぐらい真っ黒に汚れるのです。また、炭鉱で働いていた方に、お弁当の食べ方を教えてもらいました。食べる部分だけを開けて、さっとかき込みます。そうしなければ、石炭の粉がご飯にかかって、食べられなくなります。戸田先生は岩見沢の学校で、アルコール付けの真っ黒になった炭鉱夫の肺を見て、ここは決して長い間働くところではないと語っています。事実、多くの炭鉱夫が、肺が真っ黒になって、病気になって、苦しんで、死んでいきました。

そのような地域の子ども達と接していた戸田先生は、彼等の将来を考えると、一人一人が健康で幸せであってほしいと願わずにはおれなかったものと思います。その中で、後に大きく開花する戸田先生の教え方が培われていきました。

その頃の戸田先生には大きな夢がありました。東京の大学で勉強したい。さらには、アメリカ大陸に渡りたいということです。

3. 牧口常三郎を支えた弟子・戸田「城外」

a. 戸田の上京と牧口との出会い

今から90年前、大正9（1920）年1月頃、戸田先生は、真谷地の教員を辞めて上京を決意します。戸田先生の北海道での教員資格は東京では通用しません。背水の陣での上京です。その時であったのが、当時、西町小学校の校長であった48歳の牧口先生でした。この時、戸田先生は19歳です。今まで20歳と思われてきたのですが、西町小学校の同僚が弟に出した手紙を鹿児島県出水市で見つけました。その内容から、誕生日の2月11日以前の19歳の時に出会ったことがわかったのです。

初めて会った二人は、旧知のように3時間も語り合いました。響きあうものがあつたのでしょう。師弟というのは、何から何まで教えてもらう関係ではありません。響きあうものがあつて、そして、師を強く守り、行動していく中で深まっていくものだと思います。

その時、戸田先生は「どんな劣等生でも優等生にしてみせます」と話され、牧口先生は、その場で戸田先生を3か月間の臨時代用教員に採用しました。その頃、牧口先生は、有力者の子どもを特別扱いしないということで、勤めていた西町小学校から追い出されそうになっていました。それを、戸田先生は、心ある教師や父母らと共に阻止しようとしたことから、お二人の歴史は始まるのです。

この頃から、戸田先生は、上京の目的であった勉強を開始します。普及英語学校で英語を学び、日本力行会では、留学・移住のための語学と教養を身につけます。戸田先生が行きたかった国は、メキシコ、アメリカ、もしくは、ブラジルではなかったかと私は考えています。

牧口先生は、三笠小学校という「貧乏学校」、授業料のいらぬ貧しい家の生徒が学ぶ学校に移されます。戸田先生は、東京で教員試験を受け直し、三笠小学校の教員になります。割れたガラスも満足に修理されていない学校で、献身的に牧口先生を支えました。牧口先生は、ここでは退職に追い込まれそうになりました。しかし、牧口先生の人格を知る東京市の助役の一言で、逆に、東京でも五本の指に入る名門校、白金小学校に栄転することになりました。

b. 戸田の挫折と牧口の励まし

戸田先生は、この時、前後して教職を辞め、働きながら、かねてからの希望であった大学進学準備をはじめます。また、年上の看護師、浦田ツタさんと結婚し、お子さんも生まれました。牧口先生は、戸田先生の教育に対する力が埋もれてしまうのを惜しみ、学習塾を開けるように応援します。後の時習学館です。

しかし、戸田先生の家族には、その後不幸が続きます。一歳の娘が結核で亡くなり、後を追って2年後には、ツタさんも結核で亡くなるのです。残った戸田先生も重い結核でした。

横道にそれますが、『人間革命』第12巻に、戸田先生が亡くなる前年、池田先生を軽井沢に連れて行かれた話が出てきます。なぜ軽井沢なのか、気になりました。白金小学校の学校日誌に、牧口先生が軽井沢に行かれていることが出てきました。何処に行かれているのか、誰とどんな目的で行かれているのか、気になりました。何度も軽井沢を訪問、ホテルの記録を探したりしました。

一念は通じるものです。牧口先生は、結核療養中だった長男と戸田先生を連れて、夏の1週間、軽井沢に滞在されていたことがわかりました。この年の夏、牧口先生の三男は、甲子園の決勝戦で、早稲田実業の一番ファーストとして、4打数4安打という大活躍をします。牧口先生は、甲子園には行かれませんでした。戸田先生の健康を気遣い、軽井沢に連れて行かれました。師というのは本当に有り難いものです。戸田先生は、その思い出の地に池田先生を連れて行かれたのです。

c. 『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』を出版

戸田先生の最初の著作をご存知ですか。おそらく、昭和5（1930）年に出版された『推理式指導算術』と答える方が多いと思いますが、昭和4（1929）年に、最初の著作を自らがつくった出版社、城文堂から出されているのです。『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』という、小学校五、六年のお子さんを持っている御両親のために書かれた本です。

この本の内容を一言で言うと、どうしたらわが子を優等生に育てることができるかということです。もっと早く教えてほしかったという方もおられるかもしれません。「どんな劣等生も優等生にしてみせます」といった戸田先生が、どうすればそうできるか、詳しく書かれています。この本は、1冊しか見つかっておりません。先日、所蔵する図書館から、全文を文字に起こして掲載する許可をいただきました。現在、学生達とともにそれに取り組んでいるところです。

この本の序文に「七つの鐘」の話が出てきます。城文堂のマークが、ベル、鐘です。もしかしたら、七つの鐘をイメージして、会社のマークにしたのかもしれませんが。

戸田先生は、戦前、この愛児の優等化や指導算術を含めて、20冊を超える学習参考書などを出版されています。そのうち、全集に入っているのは、わずか1冊、今まで確認できたのは8冊、あと残りはまだ見つかっておりません。私の夢は、これら全てを見つけることです。他にも、探している本がたくさんあります。

d. 牧口の夢である『創価教育学体系』出版を全面支援

今から80年前、昭和5（1930）年2月の寒い日の夜、11時過ぎ、時習学館の戸田先生の部屋に、牧口先生、戸田先生の姿がありました。

校長として真剣に子ども達のために尽くす牧口先生は、本当に多忙です。その日々の行動の中で書物を読んで気がついたこと、学んだことを牧口先生は、裏紙を使って克明にメモされてきました。それは膨大な量になり、何冊もの教育書を書けるだけの量になっていました。

この時の二人の会話です。

「戸田君。小学校長として教育学説を発表した人は、いまだ一人もいない。（中略）小学校長として現職のまま、この教育学説を、今後の学校長に残してやりたいのだ。」「先生、ぜひやりましょう。」「戸田君、お金がかかるよ。」「わたしには、たくさんはありませんけれども、（中略）全部使ってください。」「先生の教育学の目的は、何が目的ですか。」「価値を創造することだ。」「それでは、価値の価と創造の創を取って、創価教育と決めましょう。」「うん、それがよい」

そのような語らいがあつて、牧口先生が電車に乗ったのは、十二時を回っていました。それから、わずか1年も経たない11月18日に、『創価教育学体系』第1巻が出版されるのです。

牧口先生の考えた『創価教育学体系』は、総論4巻、各論が8巻の全12巻でした。1冊だけ記念出版するのと訳が違います。体系が出版される2年前に、同じ12巻で『日本現代教育大系』が出ていますが、著名な学者35人がかりです。牧口先生は、35人分を一人でやろうというのです。かつて、『人生地理学』で有名であったといつても、学者としては無名です。それでも戸田先生は、「絶対やる」と決められました。

当然、まとまったお金が必要です。一つ一つ活字を組みますので、出版には、今では考えられないくらいお金がかかります。夕方から教える塾の収入には限りがあります。そこで、戸田先生は、東京府総合模擬試験という中学入試の模擬試験を毎月、東京、横浜、横須賀などで行うことにしました。それでも足りず、お金を必死になって工面しました。

どんなに良い本を出版しても、買ってくれなければ意味がありません。そのためにも、戸田先生は、城文堂から、渾身の力を込めて、自身の著作、『推理式指導算術』を昭和5（1930）年6月に出版します。後に、普及版とあわせて百万部も売れたという参考書です。まだ、『創価教育学体系』が出版される前ですが、指導算術の背表紙には、「創価教育学原理による推理式…」と書かれています。こんなに楽しくて力がつく、この本の基礎になっている創価教育学とはなんだろう、そう思わせるだけの魅力ある参考書です。

また、「環境」という月刊の教育雑誌を創刊し、学校等に配布を始めます。第9号のコピーしか残っていませんが、それは、創価教育学の特集号です。そこには、創価教育学支援会として、首相となる犬養毅をはじめ大臣経験者や文化人が名を連ねています。鳩山首相のおじいさん、鳩山一郎の名前もあります。牧口先生の古くからの友人、新渡戸稲造、柳田國男や白金小学校の父兄の海軍大将の名前もあります。おそらく戸田先生によって開拓された人の名前も多数並んでいます。当時の戸田先生は、中央大学の一学生であり、小さな塾の経営者に過ぎません。人脈をたどって、「どうか、牧口先生の出版を応援してください」と頼みまわったものと思います。

この支援会の結成には、もうひとつの意味がありました。牧口先生を快く思わない東京市の教育局の幹部が、牧口先生を退職させようとしていました。牧口先生の夢は、現職の校長として出版したいということです。牧口先生を守るため、大臣クラスまで味方にして権力と戦ったのが、戸田先生です。また、白金小学校の父兄にも応援してもらいました。何と云っても、白金の子ども達が、たくさん時習学館で学んでいましたので、その人脈から語っていったのです。

最初にお話ししたように、戸田先生は、結核といつて当時はまず治らないといわれていた病でした。大学の勉強もあります。その為に、北海道から出てきたのです。時習学館で教え、その経営もしなくてはなりません。

牧口先生の原稿をまとめる作業は、最初、牧口先生の師範学校の後輩の秀才で、自分は文章をまとめるのがうまいと思っている人に頼みました。3か月経って出来た原稿を読んでも、全く牧口先生の心が伝わっていないものでした。

二人、顔を合わせ、困ったものだということになりました。戸田先生は、「私にやらせてくださ

い」と言います。牧口先生は、すぐには「頼む」と言いません。戸田先生がいかに忙しいか、そして、健康状態もよくわかっていたからです。戸田先生が再度必死にお願いして、はじめて許してくれたのです。その時から、戸田先生は、精力的に原稿をまとめていきます。夏の時習学館の臨海学校にもほとんど顔を出さず取り組みます。

そうして出来た原稿を活字に組み、牧口先生に見せるのですが、牧口先生はどんどんそこに修正を加えるのです。当時は、一字一字鉛の活字を組んでいくのですが、変更のあまりの多さに、職人さんから泣きが入ったといます。それに対して出版を受け持った富山房の主人は、実は、『人生地理学』の時に担当した人ですが、「赤字が多いのは、）くせだよ、くせだよ」といって、笑い飛ばして、納得のいくまで修正を加えさせました。出版まで極めて短期間でしたが、質の高い内容に仕上がりました。本の装丁も、金文字を使い、真心のこもったものになりました。

後に創価学会となる創価教育学会も、創価教育学を研究する会として、『創価教育学体系』第一巻を出版した昭和5（1930）年11月18日に誕生しました。

もしかしたら、戸田先生が牧口先生に伝えなかったことがあります。牧口先生は、察知していたかと思いますが、それは、学んでいた中央大学を中退したことです。後に中央大学教授になった戸田先生と同級生の山口忠夫氏は、「当時の戸田城外は情の人、信念の人、恩師のためなら水火の中も辞さぬ心根をもった人」と、回想しています。

11月18日は、創価教育において、弟子が師匠の夢を実現した日です。『創価教育学体系』の序文の中で、牧口先生は、デンマークのグルントヴィとコルの師弟の話を通して、戸田先生に対する深い感謝を綴っております。

e. 創価教育学の目指すもの

『創価教育学体系』第1巻の冒頭には、「創価教育学とは、人生の目的たる価値を創造し得る人材を養成する方法の知識体系を意味する」と書かれています。古い言葉で、わかりにくいと思いますが、自身の幸福のため、多くの人々の幸福のため、価値あるものを生み出していける人間を育てることが、創価教育だということです。

私が、創価教育について取り組み始めたころ、創価教育とは何かを知りたくて、牧口研究の第一人者である斎藤正二先生に「創価教育とは何ですか」と質問したことがありました。「君たちの悪いところは、自分で考えないで人に質問することだ。自分でもっと考えなさい」と、突き放されました。あとから考えてみると、突き放したようで、答えはちゃんと答えてくれました。「考える人間を育てるのが創価教育だ」というのです。

アメリカ創価大学では、リベラルアーツの教養教育をしています。まさに、自分で調べて、自分で考える人間を育てる教育です。先に、牧口先生の通信教育の話をしました。そこでも目指していたのは、自分の力で考えることができる、教養ある庶民女性の育成でした。

この創価教育学の、「自ら考えることのできる人間を育成すること」、そして、「すべての児童の幸福のための教育」という考えは、当時の軍国主義政府の考え方と真っ向から対立するものでした。

戦争を進めるためには、戦場に兵士を送らなければいけません。その兵士と家族が、自分でそ

の戦争の意味を考えるようになったら、戦地に行くでしょうか。また、教育の目的が、すべての児童の幸福にあるとするならば、教師は、戦場に教え子を送り出すことが、出来るでしょうか。

戦時下において、真っ向から戦争反対という言葉を叫ぶことは極めて困難です。しかし、その中であって、このような教育学を世に問うた牧口先生と戸田先生は、真の勇氣ある教育者であると、私は思うのです。

f. 教育者・戸田の再発掘① 新教材集録の編集・発行

戸田先生による、『創価教育学体系』の出版は、総論4巻各論8巻のうち、総論の4巻が出版されました。正確にいうと、4巻に予定していた内容が膨らみ、その半分のみを4巻として出版しましたが、原稿も揃っていた5巻目は、結局出版されずに終わりました。

なぜ、あれだけの情熱を以って牧口先生の出版を進めた戸田先生が、第5巻を出版しなかったのか、大きな謎です。何か深い事情があるはずですが、本日は、その詮索はしないでおきます。

次に、各教科について書く予定だった各論8巻ですが、郷土科については、牧口先生が以前出版していた『教授の統合中心としての郷土科研究』を創価教育学会として改訂版を出版しました。それ以外の巻に相当する内容は、出版されていませんが、先ほどお話しした、『推理式指導術』をはじめとする戸田先生による読方や地理などの参考書によって、その考え方は知ることができます。

もう一つ、戸田先生が、牧口先生の教育学の普及のために尽力したことがあります。それは、月刊教育雑誌「新教材集録」の発行です。3年間ほど発行されていますが、見つかっているのは、創価教育研究所にある9冊だけです。

g. 日蓮仏法との出会いと宗教活動への傾斜

牧口先生が日蓮大聖人の仏法に巡り合ったのは、昭和3（1928）年といわれております。その後しばらくたって、戸田先生も入信されます。個人的に深い研鑽は続けていかれますが、創価教育学会が宗教活動に比重を移していくのは、昭和10（1935）年、「新教材集録」が「新教」と名前を変え、教育革命、宗教革命の文字が表紙に出る頃からです。牧口先生が先頭に立って、一対一の対話と座談会で、国家神道を信じていると国自体が破滅してしまうと粘り強く訴えました。そして、昭和18（1943）年には、会員は三千人を数えるまでになりました。

なぜ、教育者である牧口先生、戸田先生が日蓮大聖人の仏法を信奉するようになったのでしょうか。それは、牧口先生の中に、青年時代から常に、「どうしたらすべての人々を幸福にできるか」という問いかけがあったからだと思います。その答えを大聖人の仏法の中に見い出して、戦時下という極めて困難な環境の中にあっても、民衆の幸福のためにと信じて、走り抜かれたのです。なぜ、牢獄の中に入られても微動だにされなかったのか、それは、青春時代から思索してきた問いに対する確実な答えを見出した喜びと確信があったからだだと思います。

h. 教育者・戸田の再発掘② 小学生日本と通信教育

戸田先生には、昭和14（1939）年に牧口先生から託されたことがありました。それは、創価大学の創立でした。創価教育の理念に基づく一貫教育の学校の設立でした。その学校では、自身の体験も踏まえ、学びたい人が安心して学べる奨学金制度も充実したものを、牧口先生は考えていました。さらに、牧口先生の構想を考えていくと、学びたい人全てがいつでも学べる、生涯にわたって学べる学校が浮かんできます。それは、自らの力で人生を開いていく力を身につける学校でもあります。

さて、創価教育学会の活動には当然資金が必要です。しかし、大学の創立、幼稚園・小学校から大学までの一貫教育の学校をつくるためには、いったいどれだけのお金が必要でしょうか。

戸田先生は、かつて牧口先生が行ったと同じように通信教育ができる学習雑誌を昭和15（1940）年に創刊します。それが、「小学生日本」という雑誌です。後に、小学校が国民学校に変わることになり、小学生という呼び名がなくなりましたので、「小国民日本」と名前を変えることになりました。後に更に「少国民日本」と改題されます。先ほど、「新教材集録」は幻の雑誌といいましたが、こちらも残っていません。それには理由があります。通信添削に応募するには、雑誌にとじ込まれた解答用紙を切り取って送らなければならないからです。現在、発行された35冊のうち、23冊まで見つけましたが、残っている「小学生日本」はすべてきれいな本です。勉強しなかった子に感謝しております。

この通信添削の応募者は徐々に増え、最後は1万2千人にもなりました。戦争が激しくなり、満足な教育を受ける機会が少なくなった子ども達にとって学習意欲を大いに刺激したものだっと思えます。

「鉄腕アトム」というマンガをご存知ですか。日本漫画界の第一人者、手塚治虫の代表作です。世の中にはいろいろな研究をする人がいるもので、「鉄腕アトム」の中に出てくる人名など、どこから取ってきたか研究した人がいるのです。アトムは、天馬博士の息子・飛男が交通事故で亡くなり、その代わりに作られたロボットです。この研究者は、飛男という名前は、昭和15（1940）年から小学校5年生向けに発行された「小学生日本」に連載された「考蛙博士と飛男君」から取ったというのです。この年、兵庫県宝塚にいた手塚はちょうど小学校5年生でした。マンガの考蛙博士は、戸田先生によく似ています。戸田先生は、雑誌一つ、つくるにしても「考えること」の大事さ、楽しさを伝えたかったのではないかと思います。

このように多くの子ども達に親しまれた「少国民日本」も、昭和17（1942）年春、創価教育学会機関紙「価値創造」とともに、廃刊を命じられます。軍国主義政府の手は、もうすぐそこまで来ていました。

i. 大道書房と同郷の子母沢寛との交流

昭和15（1940）年から、戸田先生が、もうひとつ取り組み始めたことがあります。大道書房を設立して、大衆小説を出版することです。この「大道」という名前は、厚田村出身の大衆小説作家、子母沢寛に書いてもらった「大道」という小説の題名からつけました。子母沢の代表作には、

大河ドラマにもなった「勝海舟」があります。

大道書房からは、60冊の小説が出版されましたが、実に25冊が子母沢の作品です。その他には、銭形平次で有名な野村胡堂や、長谷川伸、陣出達朗、土師清二などが書いています。戸田先生のお兄さんが子母沢の同級生でしたので、厚田にいた頃から二人はよく知っていました。

戸田先生と子母沢との友情は、戸田先生が投獄された後も続きます。子母沢は戸田先生の健康を心配し、拘置所の所長が弓の仲間であったことから、環境の良い房に移れるようお願いしたという話が残っています。

戸田先生は、最後は18の会社を経営しました。その心の中には、『創価教育学体系』出版以上の、もっと壮大な牧口先生の夢の実現があったのではないのでしょうか。

4. 牧口の後継者としての戸田「城聖」

a. 獄中書簡及び出獄直後の手紙から

昭和18（1943）年7月6日、治安維持法違反及び不敬罪の容疑で、牧口先生、戸田先生はじめ創価教育学会の幹部が一斉に検挙されます。厳しい取り調べが続く中、ほとんどの幹部が脱落していきました。独房の生活は、精神的にも肉体的にも過酷なものです。戸田先生は、栄養不足から視力も衰え、爪もイカの骨のようになりました。

牧口先生が亡くなった昭和19（1944）年11月18日、そのお姿は安らかなものでした。多くの弟子が退転していく中で、牢獄の中でも戸田先生は厳然と戦い抜いておられました。牧口先生は、会うことがなくてもそれがわかります。取り調べの時に、戸田先生の話が出てこないからです。この11月18日は、一人の弟子が微動だにしないことに心から安心して、後事を託した日といえるのではないかと思います。

戸田先生の、牧口先生の死を知った後と思われる獄中の書簡からは、何としても生き抜いていくとの気迫を感じます。

最近、昭和20（1945）年7月3日に出獄した後の、戸田先生の御手紙が二通見つかりました。ともに敗戦前の手紙で、一通は、7月21日附で、差出人戸田城外とあり、「去る十八年七月中信仰上の儀に付其の筋より不敬の疑を蒙り茲に満二年間留置取調を受くるに至り」云々とありました。もう一通は、日附未記入で、城外改め、戸田城聖となっており、「愚生も出所後一日の休みなく債権の整理及び旧会社の整頓に努力仕り居り候」とありました。

戸田先生は、出版活動を再開するため、江戸川乱歩を訪ねています。宴席を戸田先生が踊りで盛り上げたエピソードを乱歩の息子が書いています。戸田先生は、形振りなどかまわず、何としても牧口先生の仇を討ってみせるとの必死の闘争で、再建にあたられました。

b. 教育者・戸田の再発掘③ ざら紙で作られた学習参考書

昭和20（1945）年8月15日、日本は終戦を迎えました。戸田先生は、再建の第一歩として通信教授を始めます。8月23日の「朝日新聞」の広告を皮切りに、「北海道新聞」ははじめ49の新聞に積極的に広告を出し、敗戦の荒野で学校が十分機能していない中、全国の少年少女達に学ぶ機会を

提供しました。

先ほど、資料を探して国外までもと申し上げましたが、昭和21（1946）年から昭和22（1947）年に戸田先生が出版した学習参考書が、アメリカの首都、ワシントン近郊のメリーランド大学の図書館に12冊もあることがわかりました。英語と日本語で表記された絵本も2冊あります。職員になって初めてアメリカに行く数日前のことです。

ワシントンにも行く予定でしたので、急いでメリーランド大学に連絡を取り、予定を変更して、その図書館に行きました。紙の質も悪く、触るだけでぼろぼろと壊れそうでした。戸田先生がここまで教育に情熱を傾けておられたのかと思うと胸が熱くなりました。

戦後というと、創価学会の再建に目がいきます。その大変な中にあっても、戸田先生は、教育に対する情熱は持ち続けておられたのです。だからこそ、この参考書が出版された翌年の昭和23（1948）年には、先ほどお話しした手塚治虫が、「僕はこの『冒険少年』に描いてみたいと思っていたんだよ！」と言ったという質の高い少年雑誌『冒険少年』が、戸田先生のもとから生まれたのです。

c. 戸田を支えた池田大作青年

この「冒険少年」を発行する日本正学館に、昭和24（1949）年1月、池田先生が入社しました。戸田先生の子も達に対する熱い思いを理解した池田青年は、編集長として誌面を刷新します。そして、大手出版社の雑誌との競争に勝ち抜くために、「少年日本」と名前を変えます。頼んだ原稿に穴があくとそれも埋めてと、必死に部数を伸ばそうとしました。

池田先生は、「少年日本」の広告を出してくださいと戸田先生にお願いしたことがありました。その時は、だめだと言われましたが、後で水道橋の駅に広告が出ているのを見て深く感謝したと書かれておりました。

昨年、こんなことがわかりました。戸田先生は、池田先生には内緒で、全国紙は無理でも、「北海道新聞」をはじめ18の地方紙に広告を出して下さっていたのです。さらに、いくつかの地方紙には、「ジェンナー人類を救う 山本伸一郎」と、入社したばかりの青年のペンネームが大きな活字になっていました。師匠は、本当に有り難いものです。しかし、二人の必死の努力も空しく、「少年日本」は、会社全体の経営難のため休刊となります。

『創価教育学体系』出版のために戸田先生が尽力されてから20年が過ぎて、今度は、戸田先生のために戦い抜く池田青年の姿がありました。同じように結核を抱え、30歳までは到底生きることができないと言われていた池田先生は、かつての戸田先生と同じく、学んでいた大世学院を中退し、まさにすべてを捨てて戸田先生を支え抜かれました。まさに、後世の鏡となる姿でした。

池田先生のそのような思いが痛いほど心に突き刺さるからこそ、戸田先生は、毎日仕事が始まる前に、ご自身の学んでこられたすべてを、戸田大学として伝えられたのだと思います。

d. 創価大学創立を池田青年に託す

昭和25（1950）年11月16日、戸田先生は、会社の近くにある日本大学の食堂で、創価大学創立

の夢を池田青年に託しました。池田先生は、果たして30歳まで生きられるかどうかともわからない、学会における立場も一青年部員に過ぎません。しかし、この語らいは、牧口先生から続く創価教育の流れを見ると、極めて重要な出来事です。時からいえば、『創価教育学体系』出版から20年後を2日後に控えた日でした。場所も、体系を出版した富山房の近くでした。

最近、その食堂と思われる図面が見つかりました。本当に小さな食堂での語らいでした。この時、池田先生が、戸田先生から託された創価大学は、20年後の牧口先生御生誕100周年の昭和46（1971）年4月に開学することになるのです。

さいごに

戸田先生の生涯を描いた池田先生の『人間革命』の「はじめに」には、「ともあれ、一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする。――これが、この物語の主題である。」とあります。これは、戸田先生の生涯を、余さず語った言葉だと思えます。

昭和32（1957）年9月の横浜の三ッ沢競技場における戸田先生の「原水爆禁止宣言」では、原水爆を使うものは、魔ものであり、サタンであると厳しく話されました。一人の教育者として、また、人間として、民衆を不幸にする存在は絶対に許さないとの宣言でした。「当時は、原水爆禁止と言うことも大変な勇気がある」と高崎隆治氏が言っていますが、その実現の為の道筋を引き、それに向けて、ひとつひとつ積み重ねていくことは、千里の道どころか、万里、億里の道に行くことです。

戸田先生のこの宣言を、池田先生は心に深く留められ、日中国交正常化の提言をされ、さらに、何度も中国を、そして、ソ連をと訪問され、世界の指導者との対話による平和・文化・教育の運動の模範を示してこられました。

戸田先生が共有してこられた牧口先生の夢は三つあったと思います。その第一は、『創価教育学体系』の出版です。第二は、創価大学、創価学園の創立です。そして、第三は、すべての人々が幸せに暮らせる時代を築くこと、先ほど紹介した「全人類の宿命の転換をも可能にする」ことではないかと思えます。

今年の11月18日には、戸田先生が、牧口先生の第一の夢を実現されてから、80周年を迎えます。第二の、創価大学・創価学園の創立は、池田先生の手で、札幌幼稚園も含め実現されました。第三の、悲願ともいうべき夢は、池田先生が、点と点を結び世界に広げてくださった信頼のネットワークを、更に広げていくことによって、私たちの手で実現していかなくてはなりません。その為の、先駆けを担うのが創価大学・創価学園であると思っております。

本日は、長時間、ご静聴いただき、大変にありがとうございました。